

經濟理論的思惟に先立つもの

大 熊 信 行

- 1 經濟學の中心觀念について
- 2 『物質的』或は『精神的』
- 3 生活過程の基礎としての時間
- 4 時間の配分
- 5 統一された極大満足量
- 6 生活過程の二方向
- 7 經濟的厚生(以下次回)
- 8 經濟理論的思惟の出發點
- 9 配分體系の第一次的展開

1

現に日本人のあひだに最も普通に考へられてゐるところによると、人間の或る種の欲望は『物質的』とよばれるべきものである。人々はさまで注意せずにこの言葉を用ゐるが、その意味は一般に判然としてゐるもののやうに

經濟理論的思惟に先立つもの

信じられてゐる。

注意すべきはこの言葉には特有のムードがあるといふことである。彼は物質的な人間であるとか、物質的なもののみを求めてゐるとかいふときには、それは一定の意味を帯びてゐる。人々は殆どその意味の理解にまよふことはない。それは一種不快な意味である。みづからさういはれて喜びを感じるものは一萬人に一人もない。また彼女は物質的な幸福をすこしも望んでゐるのではないなどといふときにも人々はそれを聞いて直ちに何事かを解しえたかのやうに感じる。『物質的には恵まれてゐる』とか『物質上の援助をする』とかいふ言葉は世上しきりに用ゐられてその意味について疑ふものは殆どないほどである。しからば一體この物質的なものは何であらうか。それは經濟的なもののシノニムなのであらうか。もしさうとすれば經濟的なものは低いもの、卑しいもの、人生の上限には屬せずして下限に屬するものといはなければならぬ。そしてもしもそのやうなものを科學の課題とするところのものが經濟學であるとするならば、かくのごとき科學が人類のもつとも若々しい高潔な精神をその領域内に導きいれることは恐らく一つの難事のごとく思はれるであらう。

經濟學が物質的なものを取扱ふ科學であるといふ一般的印象をとり消すことは非常にむづかしい。にもかかはらず、この科學の窮極目的に接近すれば接近するほど、我等の感ずることはこの科學の中心觀念は物ではなくして状態であるといふこと、その状態も外部のそれではなくして内部の、即ち心の状態であるといふことである。もつと間違のないやうにいへば、經濟學の根本思想が歴史的に展けて來たあとを見ると、一面にはそれが現在に近づけば近づくほど客觀的な外部的な量から主觀的な内部的な量の問題に、或は客觀的な外部的な量を通じて主

觀的な内部的な量の問題に、進んで來てゐるといふことである。

人間の或る種の欲望が『物質的欲望』とよばれるときには、暗々裏に他の反面に『非物質的欲望』の存在が考へられてゐる。もしも經濟學が『物質的欲望』の對象のみを取扱ふものであると信じてゐるものがあるならば我等はその考がいかによつてゐるかを指摘しなくてはならぬ。もしまたさう信じてゐる研究者やこの科學の限界をそこにどこめなければならぬとする經濟學が現存するならば、その理論的構成が決してかかる限界にどこよりえない所以を内在的に批評しなくてはならぬ。もしこの小篇に從來の經濟學があたへるところの表面的印象から際立たしめる特徴があるとすれば、その一つは右の一點に新しい音調をひびかせようとする点にあるであらう。

我等はまづ通俗の世界で物質的欲望とよばれてゐるものがいかなる對象の範圍までを包括するのであるかを吟味し、その言葉が日常一定の意味において使用されてゐるにもかかはらず、究竟的にもつてゐるところの救ふべからざる曖昧を指摘し、藝術的な、宗教的な生活充足などといふものが、一般的な經濟的充足といかなる關係にむすばれてゐるものであるかといふこと、――つまり表面的な『物質的』な生活充足の背後に、いかなる『非物質的』な、精神的な生活充足の系列をたどりうるかといふことを論じなければならぬ。かくすることによつて經濟學の目的にたいする通俗の誤解を排去するのみならず、經濟學の中心的興味がその本質においていかなる仕方でその他の人類の喜ばしき精神的興味と接觸するものであるかを指示しうであらう。そして經濟學そのものの方法と課題とへ入るのはその後でなければならぬ。なぜなら經濟學の方向やその到達点や他の精神的興味との接觸の仕方などについて漠然と何事かを感知した人にしてはじめてこの科學が自分に縁のあるものかどうかといふこ

とを判斷することができ、學ぶに値するか値しないかといふことを決定することができるからである。

だがその研究方法や課題提起の仕方などについて遽に縁遠い感じを讀者にいだかしめ、模索的にも折角經濟學の領土へ接近して來た人々の人間的情熱や智的興味がむくいられずに逐ひかへされるとしたならば、恐らくその責任は經濟學者の側に重く歸すべきではあるまいか。一つの命題を述べるのにも暗黙のうちにゆるされてゐる諸條件を悉く明かにしないではおかぬやうな習性を伸ばすことは經濟學者自身のためには好ましいが、科學の出發點で明かに示された至高の興味が理論の展開するあひだにいつのまにか背後へおしやられてしまふのは讀者にとつて決して好ましいことではない。學者は彼の頭腦の中で念々忘却することはないとしても、讀者はいつかいとぐちをうしなひ必ず路をまよふのである。であるから一旦經濟學の中心觀念と嚮導的興味の本質とを決定した以上、すべての記述を絶えずその興味に照應せしめて、――すなはち問題を幾十度でも出發點へ回歸せしめて、理論の展開が最初の問題からはなれて來たのではなくして却てその反對に最初の問題の内奥に飽くまで深く突入して來てゐるのであるといふことを讀者に感知せしめなくてはならぬ。もしこのことが一般的にいひえないならば、すくなくともこの小篇においてはさうしようと欲するところである。

2

さて『物質的』とは何であらうか。通俗の世界においてこの言葉が用ゐられるときには、それは『精神的』と對照された言葉のやうである。彼は物質的な人であるといふときには彼は精神的な人であるといふのと丁度正反

對の意味をもつてゐるやうに見える。恐らくこの二大別は、物と心、物質と精神とを二つの領土と考へるところの、舊いしかしながら却々深い思想的根柢をもつた世界觀から發してゐる。しからば物質的欲望とは何であらうか。それは『經濟的』欲望の意味であらうか。もしも『物質的』といふことが『精神的』ならぬことであり、そして『經濟的』といふことが『物質的』といふことに通じるのならば、『經濟的』といふことは『精神的』ならぬことに通じるであらう。『物質的』といふことが低級であり『精神的』といふことが高級であるとき、その『精神的』は宗教的、道德的、智的、美的などといふ要素をふくむもののやうに見え、そして『物質的』はそれらのものにたいする無視或は無知、ならびに『物慾』といふ通俗の言葉が、人々にあたへる漠然たる感銘の中にふくまれてゐる卑むべき貪慾の句をただよはしてゐる。『精神的』といふ言葉の中には『物質的』なものにたいする蔑視があり、『物質的』といふ言葉の中には『精神的』なもの否定があるやうにさへ見える。

しからば『物質的』なものへの蔑視をふくむところの『精神的』な欲望とはいかなるものをさして一般にいふのであらうか。訪問着に着換えて外出しようとする母親の姿を見つけてそのあとをおひたがるころのききわけのない幼兒は、母親がどんなよいものを約束しても満足しない。彼は菓子や玩具をもらふよりは母親に手をひかれて街へ出たいのである。ここにはすでに何かしら『物質的』なものへの蔑視、——意識され表現された蔑視がはじまつてゐる、とてもすべきであるか。失はれた愛人の愛をよびもどさうと苦慮する青年の願望から抽象的な思惟の成果として偉大な結論に到達しようとする科學者の願望、見神をめがけて宗教的體驗の深みへおもむかうとする信仰家の願望のごときに至るまで、それらの願望をさして『物質的』とよぶことは不可能なやうに考へられ

る。大自然の壯嚴な展望や藝術作品のかがやかしい氣品から精神的充足を求めようとする願望、讀書と實驗と推理とを通じて一つの科學の世界に踏み入らうとする願望のごときをさして『精神的』とよぶことは當然なやうに考へられる。

しかるに美衣美食にたいする欲望に至つては何人もこれを『物質的』とよぶに躊躇しないやうである。しかれば欲望には以上のやうな見地から甄別さるべき二方面があるのであらうか。否、そのやうな二種別は斷じてありえない。互に反撥し對立するものとしての二種類の欲望が人間生活の中に相尅してゐるといふ考は通俗の考としては必ずしも無稽なものではないが、欲望一般についていふとき、その『物質的』と『精神的』との二種別は、實踐上においても理論上においても意味なきものである。もし我等の中に右のやうな思想が幾分なりとも影をさめてゐるならば眞先にこれを排棄しなくてはならぬ。人間の欲望に物質的なものと非物質的なものが併存してゐるといふ考を排棄し、物質的なものがいかに非物質的なものへ聯續し、非物質的なものがいかに物質的なものに依存してゐるかといふそれらの相互關係を新しく組織立ててみるこれが第一に必要である。否、物質的なものに關聯しない『精神的』欲望、精神的なものに聯續しない『物質的』欲望などといふものは存在しないといふこと、欲望が欲望であるかぎりにおいてそれは物質的存在としての人間の欲望であり、人間が空間的時間的存在であるかぎりにおいてそれは空間的時間的に存在する欲望であり、生活の實體としての欲望充足過程は必ず空間的、時間的制約を受け、人間の肉体的存在をその前提とし基本とするのみならず多くの物質的條件を不可缺少とするものであるといふことを明かにしなくてはならぬ。宗教上の斷食のやうな行爲——『物慾』の一時的な極端な否

定——すらも、その行爲或はその状態に入るためには、それに入る直前まで平素の食事が必要とされなければならぬ。それこそは修行者をして五週間或は七週間斷食を可能ならしめる唯一不可缺の豫備條件ではあるまいか。

大自然の展望や純正美術の鑑賞から『精神的』充足を求めようとする願望については何人もこれを物質的欲望と稱するのに躊躇するが、裁縫師に美衣を調製させみづからそれを着用しようとする願望に至つては何人もこれを物質的欲望とよぶに躊躇しない。それは就中その尤なるもののやうにさへ見える。だがもしも彼女の美衣にたいする願望が淺薄輕佻な流行への盲動的追求や富力の衍示的動機を微塵もふくむのではなくして、色調の溫雅な配合やスタイルの優美輕快などにたいする銳利な鑑識と纖細な嗜好性から發するのであるとするならば、その願望の基本となつてゐる彼女の趣味は名工や巨匠の藝術的資性と何等異るところのない共通の本質に屬するものである。彼女は恐らく彼女を喜ばすところの衣裳をみづから所有せず着用せずとも單に見ることのみによつて一種の『精神的』充足を感じるに相異なく、それを所有し着用することによつて二重の満足を喫するであらう。

『物質的』と『精神的』とを飽くまで區別しようとする人は、こゝで次ぎのやうにいふかも知れぬであらう。

——彼女が單に優美な衣裳を鑑賞しようとするのみにとゞまるならばその願望は美術展覽會場や博物館に入らうとする願望と同一系列に屬するものであり、したがつてたしかに『精神的』であるが、彼女が單に鑑賞のみにとゞまることができずしてそれを手に入れようとし、着飾らうとするときに至つて、彼女の願望は疑ふべくもなく『物質的』に轉じたのではないかと。いかにも鑑賞能力なくして所有願望の太だしい事例すらおびたしいのであるから鑑賞願望と所有願望とが別箇のものであることは疑ない。この類別は決して無意味でないばかりか我

等の思索にたいして重大な示唆をあたへるほどである。だが『物質的』願望といふものを單なる所有の願望のみに限定してしまはないかぎり、以上のやうな欲望の二分は明かに不當であり、そして『物質的』はすなはち物を所有せんとする願望であるといふのは恐らく不當であらう。利用せず使用せずして所有そのものにのみ満足を感じることがすなはち『物質的』であるといふのは、『物質的』の意味を不當にせまく解するものである。

それでは次ぎの例に移らう。我等は古代希臘の彫刻の数々を寫真版によつて鑑賞し、驚嘆と歡びを感じてゐる。我等は殆どそれを所有しようと思へない。かくのごとき満足感は『物質的』なものから非常に遠いやうに見える。しかるにもしもここに寫真を見るだけでは我慢のできない美術の鑑賞者または研究家があつたとしたらどうであらう。彼はすこしもみづからミロのヴィナスを所有しようとは思はない。またシステインの壁畫を自分の天井裏にはりつけてミケランジェロの壯嚴な憂鬱から壓倒されようなどとも思はない。彼はたゞ一生に一度肉眼をもつてぢかにそれらの作品に觸れることができるために、それらの前に或はそれらの下に立ちたいと思ふだけである。この願望は『物質的』であらうか。彼は何物をも所有しようと思つてゐるのではない。だがそれらの古作品の前に立ちたいといふ彼の願望はそれが空想でなくして現實的なものであるかぎりにおいて、佛蘭西或は伊太利まで旅行したいといふ願望を必至的に内含してはしないだらうか。通例の旅行の願望は太だ多くの欲望を内含せざるをえないものであり、その願望はそれらの欲望の總和としてのみその強さと大いさとを具現しうるのである。かくして彼の『精神的』な願望の大いさは『物質的』な種々なる欲望の總和として表現され、彼がその旅行を企てたときには人々は彼がいかに美術研究に熱心であるかをほぼ推察するのである。一人の學生が彼の時間の

大部分を圖書館に送り、彼の小遣の大部分を科學書の購入に投じるときには、人々は彼の智識慾が他のすべてのものを凌駕してゐるらしいと觀測し、そしてその觀測はあやまつてゐないのである。

ここまで考へたときに、我等はすべて人間の生活の内容をなすところのすべての欲望と欲望充足とがいかにその現實の姿において時間的空間的制約を受け、物質的諸條件に依存するかといふことを考へざるをえないではないだらうか。古美術行脚も聖地巡禮もこれらの諸條件に依存せずしては果たしがたく、いかなる輕微な願望——たとへば外界からいささかもさまたげられることなしに三十分間靜寂の中に冥想にふけりたいといふやうな願望のごときすらも、かかる願望には一見何等『物質的』な要件を豫定する餘地はないやうであるが、非常に多くの内外の條件なくしては決して果たしがたいのである。彼はすでに適當に食物と睡眠とをとり、そして激しい疲勞におちいつてをらす、また彼の外界は騷擾をかもしてゐてはならぬ。最後の條件のごときは近代都市にあつて必ずしも購ひやすい條件ではなく、交通機關の音響や誰はばからぬラヂオの大聲から完全にのがれることは時として彼に思ひもかけぬ高價な經費を要求するかも知れぬ。

3

かうした分析に正しい理由があるならば、もう我等はここで通俗の世界でいふところの『物質的』欲望といふ言葉を撤回してしまつてもよいのではないだらうか。藝術的な、宗教的な、或は智識的な生活充足などといふものが一般的な經濟的充足といかなる關係において聯續し或は結合してゐるものであるかといふこと、窮極的な生

活充足と觀念されてゐるものの前方に、いかに多くの充足系列が必至的に存在しなければならぬかといふことが明瞭になつたのではないだらうか。信心家の喜捨奉納や、慈善家の慈善行爲はその動機を信心や博愛心に發するものであるが、その行爲と満足とは經濟上の支出によつてのみ購はれるのであり、そして彼等の『精神的』満足は『物質的』にのみ到達されるのである。して見れば、欲望が時間的な我等の物質的存在乃至肉体的生存を現實に支配してゐるものであり、生活々動の方向を指示し、生活々動の分量を支配する力として君臨してゐるものであるかぎり、そのいかなる種類たるを問はず多くの物質的現實的條件を要求し、また必ず要求しなくてはならぬといふことが眞理ではないだらうか。人間の欲望充足は内面的にいへば精神の或る状態から他の状態への過程であつて、かかる過程は必ず肉体的の、したがつてまた外的の諸條件を前提し、外的の過程に副はざるをえないのである。ただ或る種の欲望充足過程には著しく目だつところの外的諸條件の組織が必要とされ、或る種の過程にはさほどではないことがある。後者の場合においては實は一つの充足過程に必要な諸條件は他のいくつもの充足過程に普遍的に必要な諸條件であり、それは最も基本的な、最も一般的な諸條件であつたといふにすぎない。

すでに述べたところで示されてゐるやうに、我等は欲望といふ言葉の意味を極めてひろく殆どその最大限にまで用ゐてゐる。現實に人間の肉体的存在を支配し、その場所と時間とを指示し、彼の生活内容を決定するところの力、彼をして行動せしめ或は行動することを引きとめるところの力——この力によつて人間の全生活が規制されてゐることは確かであるが、この力の起点までたどつてゆくときに我等は必ずそこに人間の一切欲望を發見するといつてよいのである。もし一人の男が心の中で働かなくてはならぬと考へ、怠けてはいけなと考へ、——

その考になやまされながら、事實において寢床の中で蓑をくゆらしてゐるとすれば、彼は事實において働くことよりも怠けることを擇んでゐるのであつて、彼の欲望は時間的にも場所的にも彼の位置を指示し、彼の生活内容を決定してゐるのである。一人の家婦が家事のいそがしさに氣をいらだちながらも訪問先で半日のおしやべりを中止することができなかつたとすれば、彼女のおしやべりはいふまでもなく一の欲望充足過程であらう。いかなる欲望充足過程といへども時間的経過をとらぬものはありえない。つまり時間は制約であることもに一つの生活素材であるといつてよろしい。そしてそれが一つの素材であるといふ思想こそ、生活充足過程を理解せんとするに當つて經濟學が眞先に執らざるをえない見地である。我等の充足過程において必要とする幾多の物質的要素のほかに、すべての充足過程を通じて缺くことをえない最も基本的なもの、最も普遍的なものは實に時間である。ひとりの人が何等かの享樂に身をゆだねやうとするとき、彼は恐らく若干の物質的條件を必要とするのを覺悟するであらうけれども、その條件の最も輕微な場合、——日常の言葉では殆どその條件を必要としないといつてゐた場合においてすらも、これ一つのみは儼然として要求されなくてはならぬところの最も基本的な、最も普遍的な素材は、實に時間である。いかに多くの多忙なる人々が、彼等の享樂を趣味の缺乏や金錢の缺乏からではなしに、時間の缺乏から斷念してゐることであらう。時間の幅なくして過程はありえない。一瞬にして投じられる義損のごときすら一つの充足過程である。彼の行爲を制止して見るがよい。彼は久しきに亘つて道德的自己不滿あるひは不安の中にあるであらう。博愛家はただ一日の慈善行爲をもつていつまでも充ち足りてゐることはできない。彼はいくたびもその行爲をくり返し、そしてかかる彼の支出は恒常的な一つの費目を成すのである。であるから

一瞬的な義損のごときすらも或る時間に亘る満足感を伴ふのを常とし、ほぼ一定時を過ぎれば右の満足感は無刺戟となり、新しい満足感への衝動が芽ぐむのである。

人間生活は一切充足の過程であり、この過程は時間的過程である。いかなる状態にある人間でも生きてゐるかぎり彼は曾てその過程のそこに出たことはない。我等はどんな人間でもその生きてゐるかぎり欲望に支配されてゐない瞬間はないと認める。疲れ果てた人が、欲も得もないといつて床上に身を投げ出したときに、彼はその状態において一つの新しい欲望充足に身をゆだねたものと認める。さう認めれば休息も睡眠も生活充足過程である。牢獄内の囚人、兵營内の兵士は最も厳しい外部的な規律に服し、生活行動における自由と選擇との範圍は極めてせまい。だがこの外的拘束は現實において最大多数の人類の生活にも臨んでゐる。文明諸國において日常の仕事が氣ままな時間に開始し、思ひのままに中止することのできる境涯にあるものは極めてすくない。もつとも勤務時間が長きに失するならばその報酬の潤澤といへども或る種の人をその職務に惹きつけるに足らぬであらう。であるから人々には業務選擇の上に多少の自由が残されてゐないといふのではない。また労働時間の外的拘束にたいする抵抗は、労働運動に課せられた貴重な任務であるが、この抵抗は労働時間の短縮を通して自由時間の延長をめざすのであり、めざすのでなければならぬ。自由束縛の最も極端な場合すら、そこに全然生活がないといふのではない。幽閉された者にも多少の自由があり、したがつて生活がある。フィドル・ドストイェフスキーが死刑臺上に縛せられた五分間を三つに配分し、順々に彼の親しい人々のことを考へるのにその時間を費さうとしたとすれば、充足過程における配分素材としての時間といふものがこの時ほど鋭く表面に現れたことはない

といはなければならぬ。だが短い旅行者にとつて時間が旅費の總額とともにいつも計慮の焦点であることは誰も知る通りであり、無駄な時間を費すまいとする計慮は無駄な金銭を費すまいとする計慮にたいし優位を占めるほどである。だが旅行が長くなるとき、——それが最も長い旅行即ち地上の生涯であるとき、かなしいかな、人はその計慮について緊張を失つてしまふ。物質的存在、肉体的生存としての人間生活は時間の埒外にあることはできない。人間は時間の中に働き、時間の中に享樂し、時間の中に休息する。端的にいへば時間は彼の生活素地である。いかなる人間もいはゆる彼の無一物の場合といへども彼の生活素地としての時間を所有する。彼の上に束縛がなければ彼はその時間をいかやうに費すも自由である。時間は即ちすべての人間によつて費さるべき最も本源的な消費資料であり、生活の計慮的秩序の根柢によこたはるところの一次的な配分素材である。——この見解は在來の經濟學からいふと一見奇異である。しかもこれは時間をもつて直ちにそれ自体惜むべきもの、また慎重に費さるべき一物と解する人生日常の觀念に卒直に通ずるものである。この觀念が普遍的な經驗から發したものである以上、我等の思索はその經驗にまで溯及しなくてはならず、その到達点に理論の出立点をおかなくてはならぬのではあるまいか。

4

いかに時間を費すか。——これは一日の問題であるとともに一生の問題である。人々はつねに判斷し、つねに實行し、絶えず修正し、絶えず改善する。だがその大部分は生活の慣習にしたがふのみである。そしてその根柢に

は、自然的及び社會的條件と、それより一層廣い生理的條件とがよこたはつてゐる。人類はその通常の狀態において夜間睡眠をとらねばならず、覺醒後は適度の筋肉運動を欲求し、また食物とともに休息を必要とする。これらは野蠻民族と文明民族のすべてを通じて一貫する基本的な生活充足過程であり、この過程は一日、一週或是一年を單位としてその總時間をいくつかの部分に分割するのである。

就中一日が最も短い時間配分の單位すなはち配分期間である。この單位の中に大體三つに配分された特殊部門即ち睡眠、勞働、自由活動の三部門が考へられてよいであらう。通常の場合において人はその生活の單位を一日におくが、この方法の根柢には動かすべからざる自然的條件がよこたはつてゐる。一日は單なる二十四時間ではなく地球の一自轉に要する時間であり、そして地球の一自轉は地球の全表面に日光の明暗を交替する。たゞに人類のみならずすべての動物、いな植物すらも晝夜の交替から生理的規制を蒙らざるをえない。人間が白晝いかに熟睡しても或る種の神經をやすましめえないといふことは近時生理學者の説くところである。また季節に依存する産業生活においてはその繁閑は専ら氣溫の自然的推移に支配されるのであるから一年に亘る生活々動の時間的配分は季節によつて規制されることが著しい。だがいづれの産業も社會的生産における全組織の一部であり、聯鎖であるかぎり、季節による繁閑は多少とも全體を循環する波動であらう。人間の意志に先立つところのこれらの自然的規制の存在を一應認めた上で、我等は大体次ぎのやうにいつてよいのではなからうか。

人間はその自由な狀態において彼の時間を彼の欲するままに使用する。何ものかを獲得しようとするとき、彼はそれには必要な素材を使用するとともに必ず彼の時間を使用する。何事かを享樂しようとするとき、彼はそれに

必要な素材を使用するにも必ず彼の時間を使用する。何事をも爲すまいとするとき、したがつて何ものをも必要とせず、何ものをも使用しまいとするとき、彼は猶且彼の時間のみは使用する。ここに配分素材としての時間の特質がある。しからば彼の生活充足の計慮的な出發点は、詮するに時間をいかに費すかの問題であるといふべきではあるまいか。これは一日の問題であるとともに一生の問題である。彼は與へられた事情の下において恐らく最善と考へられる方向を執るであらう。——然り、恐らく彼はみづから最善と信するところに事實したがはぬかも知れぬ。たとへば年少の受験生は、一日を區ぎつて八時間の睡眠、十二時間の勉強、四時間の自由時間とさだめ、さうした日課表を書齋の壁に張りつけ、みづから堅い決心をしたとしても、彼の理想的な時間配分は事實においてその通りに行はれないかも知れぬ。彼は九時間寢床の中にをり、そして八時間勉強し、残りの七時間をばんやりして過ごすかも知れぬ。これは彼の理想とはちがふけれども、しかし恐らく彼の實踐においてなし得た最善のもの、彼にとつて現實的に可能なる最高の生活充足過程であつたと認めてよいであらう。尤も彼の意識においては勉強時間以外の部分は無意義の部分であるか或は勉強のために避けがたい單なる休息の、單なる疲勞恢復の、時間として考へられてゐるに過ぎないかも知れぬ。だが總じて休息や慰安や日本人のいはゆる『氣晴らし』の時間を、單なる不可避的のもの、主要目的にたいする手段的のもの、と觀するか、それともそれ自體人間生活の價值ある一部分と觀するか否かは、世界觀の如何によつて分れるところである。そして不可避的な勞働以外の自由活動やその素材的基礎であるところの閑暇（自由時間）にたいして人生的意義を認めようとすることは、一方勞働そのものに至高の人生的意義を認めようとする力づよい思潮が存するにもかかはらず、近代的な生活態度

の一つに屬するものである。近代産業制度のもとにおける勞働時間短縮の普遍的要求の根據については論すべきものが多々あるとしても、その表面的な、道德的な表現においては『教養』の時間延長として主張されてゐる。ここに教養の時間とは自由活動の時間であり、自由時間であり、閑暇である。閑暇の價值は物財の價值と對比されるべき價值であり、對比されなくてはならぬ價值である。この一點はまだ今日まで經濟學の理論のなかに導入されることの乏しいものであるが、今日以後の經濟學においては明確に導入されるべきものである。だが閑暇が經濟學上の一觀念として取扱はれ得る爲には、一定の理論的方法を通過しなければならず、そしてその方法こそは上來述べた所の時間配分の思想に基くのである。だからその試みもまたこの小篇の小課題として數へることが出来る。

5

人間生活をその具体性において觀察するとき、それは一つの時間的過程であり、その過程は内容的には欲望充足過程であると我等は解して來た。さてその欲望は實に多様であつて、その欲望の性質如何は人間の生活内容の品質如何を決定するのである。であるから人生について何等かの價值觀念をもつてゐるものは、——スティックであらうとエビキュリアンであらうと、彼の胸に萌すところのもろ／＼の欲望をそのまま放置してその赴くところに身をゆだねるといふことはない。人はおの／＼もつところの人生觀や哲學や、もつとくだけていへば日本人のいはゆる『分別』にしたがつて、その欲望を統制するであらう。いかなる欲望が高貴でありいかなる欲望が下賤であるか、またなにゆゑに高貴であり、なにゆゑに下賤であるかといふ問題、——つまりいかなる生活が價值高

くいかなる生活が價值低いかといふ問題は、人類に思辨的習性が生じて以來の問題であるが、すべての人々はこの問題について何等かの共通觀念をもつてをり、また一つの時代を通じてはばすべての人が許容するであらうやうな或る有力な觀念はいつも存在するものである。

經濟學がかかる人生問題を解かうとするものでないといふことは殆ど斷る必要のないことである。だがそれはかゝる問題の提起を不必要とするのではなく、またかかる問題の存在を無視否定するのでもなく、まさにその正反對である。經濟學はむしろすべての人間的理想を前提し、理想的觀念によつて動きつゝある、或はすくなくとも動きつつありとみづから信じてゐる人間の研究を目的とするものである。ただ經濟學は理想そのもの、觀念そのものを取扱はずに、觀念や理想によつて動きつつあるところの、或はすくなくとも動きつつありとみづから信じてゐるところの、人間の生活過程そのものを取扱はうとするものである。人間の一切の理想、一切の觀念は、その過程を通してのみ『實現』される。であるから經濟學は、人間の努力や活動のいかなる部面でも、人間の歡喜や満足のいかなる部面でも、その視野の外へ除外せず、また除外することはできない。なぜなら經濟學の對象は人間の充足過程であつて、この過程の外に存在する生活なるものはありえないからである。

かくして人間のいはゆる藝術的行動、宗教的行動といふやうなもの、それが人間の行動であり生活過程である以上、經濟學的な視野の中に入らざるをえない。經濟學的な視野といふのは、すべてこれらを欲望充足過程と解するによつて展けてゆくところの、そしてその限りにおいて統一を失はないところの、世界をいふのである。そこで問題はかうである。——一體何のために人間の全生活過程を統一的に觀察するやうな見地が必要なのであ

らうか。

一體何のために人間の全生活過程を統一的に觀察するやうな見地が必要なのであらうか。我等はこれにたいして最も素朴な答を用意しておかう。それは人間の全生活過程は無秩序なものではなく、統一された或るもの、一箇の全体、として理解されなければならないからといふのである。人間はその境遇と氣質の如何によつてその程度を異にするにしても、生活を展開すべき時間の或る幅にたいし明確な意識をもつてをり、その大小の範圍において彼の計慮が全幅を統一するのである。或る者はわづかに一日一夜についてのみ相當に計慮し、他の者は一箇月については相當に計慮するが、一年の計を思はず、また他の者は一箇年或は生涯の計慮のみにとどまらずして子孫の上に思を至すのである。かくも廣い全幅にわたる計慮は、もつと狭い範圍における箇々の計慮の總和であるが、より狭い範圍の計慮と、より廣い範圍の計慮とが互に牽引して一つの全体を成すかぎり、生活の時間的統一圏はその大いさを推持するといはなくてはならぬ。

しからば統一された全体としての生活過程を理解するといふことの實質的な意味は何であらうか。生活内容是人を異にするにしたがつて異り、また同じ人でも時を異にするにしたがつて異なる。だが生活目的をいかに樹てると樹てぬとを問はず、人間が時間的過程の中に生きるかぎり、その必ず期するところは、生活内容の最大限の充實であらう。ただ何をもちて充實せんとするかはおのおの選ぶところによつて異なるわけであるが、我等が間違なくいひうることは、およそ人間は可及的に最大限の満足を求めてゐるといふ一事である。その満足が忌はしい怠惰であらうと卑むべき暴飲であらうと、或は嘆賞に値する勞作への熱中であらうと、乃至それらすべてのもの

總和であらうと、人間が時間的過程の中に生きるかぎり、そして行動の自由が與へられてゐるかぎり、彼の生活が必至的に形成するものはその最大満足への諸行動の力學的擴充であるといつてよろしい。

ここに可及的な最大満足或は最大限の生活充實といふとき、我等はすでに暗黙のうちにそれらの満足乃至充實を制約してゐる條件を考へてゐる。最大満足とは無限大満足ではなくして、一定條件の下に可能なる最大満足である。しかばその一定條件とは何か。――時間である。もつと正しくいへば時間の限定性である。人間が生きてゐるかぎり必ず期するところは、その時間の限定性の上に立つ最大限の生活充實である。彼は必ずしもそれを意識する必要はない。意識せずとも自由に放たれた人間は彼の欲するところにしたがつて行動し、先づ以て自然が與へてゐる時間上の細胞的な生活單位――一晝夜――の中で彼の最大満足を擧げようとするであらう。この傾向性は人類にのみ固有のものといふことはできないけれども、人間が自己の生活を意識し、生活秩序を意識的に統制するに及んで、それは極めて顯著なものとなるのである。だが自己の生活について意識するところの最も乏しい幼童ですら、ひとりで立ち歩き、そして遊び仲間の群に立ちまじることが出来る時分には、彼の一日のうひうひしい自由な生活を、最も満足のゆくやうに展開してゆくであらう。即ち彼は心のおもむくままに好きなところへ遊びに出かけ、飽いたときにそこを去り、或は他の遊びに移り、くたびれたときに母のかたはらに眠り、めづめたときに彼はまた何事かを求めるであらう。かくて一日を遊びほうけて暮す幼童の生活にも最大の自由とともに最大の満足があり、そしてその満足は一種類の満足ではなくして幾種類もの満足の總和である。人間はその生活過程をみづから意識するにしたがつて、その時間的計慮と統一とを豫め確立しようと試みるやうになり、彼の生

活經驗は求めずして彼に一箇の指針を與へるやうになるであらう。人間が彼の生活過程に秩序を與へ、時間的に統一しようとする傾向は、實に彼の本性的構成に基くものであつて、教養と經驗とがこの傾向を助成するとはいひながら、それは後天的に獲得された一つの技能とはちがつたものである。それは寧ろ人間本性の中に存する一箇の力學的な、不可抗的な傾向、――重力の法則に近いやうなものと解すべきである。

すでに述べたところの中に我等は次ぎのやうな事實を明瞭に認めて來てゐた。即ち可及的な最大満足或は最大限の生活充實といふとき、それはただ一つの満足についてゐるのではなくして、いくつもの種類の、實を異にする満足の、總和における最大限についてゐるのだといふことである。生活は欲望充足過程であり、充足さるべき欲望は無數であり、生活充足の素材的基礎としての時間は限定された分量である以上、無數の欲望の充足に關しては選擇と安排とが行はれなければならず、したがつて可及的な最大満足とは、かかる計慮の結果としての總和のそれでない。生活過程におけるこの時間の限定性が、人間の生活秩序が依つてもつて立つところの眞實の制約的基礎であるといふことは、在來の經濟學が曾て觸れようとしたことのない理論上の一極点であるが、この一點に到達すべき方向を示すところの學理は、すでに經濟學の公共財産である。であるからその學理を推しすすめて至當な到達點に導くことは我等の任務であるといつてよろしい。すくなくともそれを試みることは小篇の主要目的の一つに決定したく思ふのである。

だがすでにここで次ぎのやうな疑が起らないだらうか。――いはく、人間の最大満足といふことが、その内容の人生的價值を不問に附して、單なる量としてのみ考察するといふことに猶且いかなる意義が残つてゐるのである

かど。この疑問に答へることは經濟學の中心觀念について答へることであり、そしてその答こそは經濟學が學ぶに値する科學であるか否かの判斷を人々に得せしめる契機となるのではないだらうか。

また右に反して次ぎのやうな疑の起ることはないだらうか。——いはく、人間の最大満足の内容が種類を異にする充足の總和であるといふのは一應よいとして、藝術的、宗教的、その他種々意義を異にするところの人生的價值をめざし、その各目的にたいして系列する許多の充足過程が、それぞれ質を異にする充足内容を齎すものでありながら、どうしてその各内容の總和が一箇の量として考察し得られるのであるか。我等はいかに讀書慾を充たし得たどて飢餓をまぬかれることはできない。一つの欲望はただその欲望に固有の對象を適應せしめることによつて充足され得るのであつて、これにたいして他のどんな事物を配したところで、めざす結果を擧げることではない。すでにかくのごときものとすれば、それらの質を異にする箇々の内容を一箇の量に轉化して満足の總量を求めるといふことは不可能ではないかど。この疑問に答へることは經濟學の方法について答へることであり、そして經濟學の方法について答へることは同時に經濟學の目的について答へることとなる。——であるから右の疑問は二つであるが、答は一つである。そこで我等は經濟學の中心觀念は何かといふ問題にすすまなくてはならぬ。

6

經濟學の中心觀念は何かといふことについては、すでに多少の暗示を残して來たが、これを動かすべからざるものとして決定的に、明晰に表面におし出すためには、我等はなほもう少しの用意を要すると思ふ。といふのは、

人間生活がその具体性において觀察されるかぎり、それは欲望充足過程であり、そしてそれは内面的には時間の限定性の上に立つところの最大限の生活充實であると認めては來たものの、生活内容としての一切行動の種別についてはまだ何等考察するところがなかつたからである。欲望充足といふ言葉を最も廣い意味に解し、そしてその過程はいづれも何等かの人間の行動の狀態であると解して來たからには、その行動を或る一定の見地から類別することが必要である。その必要の生ずるのは一つには經濟理論的思惟の出立点に立つて執らねばならぬ一定の見地がそれを要求するからであり、また一つには人類文化の發展方向に關して我等がもつところの關心がそれを要請するからである。

人間の生活過程は時間的過程であるが、人間生活のどんな部分を切りとつてみても、切りとられた時間的斷片の中に見いだされるものは、何等かの充足内容であり、それは生活の統一的な全體にたいする部分としてその意味を簡別的に理解することのできるものである。それは必ず積極的乃至消極的な或る行動の狀態である。休息の狀態も睡眠の狀態もそれ以外に屬するものといふことはできない。したがつて生活過程は行動による充足過程であり、行動なき充足過程はあり得ない。彼はいま麵麴を食べてゐる。明かに充足過程であり、行動の過程である。彼はいま力いっぱい朝の空氣を吸ひ込んでゐる。明かに充足過程であり、行動の過程である。彼はいま怪我をして繃帶を巻きつつある。明かに充足過程であり、行動の過程である。彼はいま手術臺の上に泣き叫びながら外科醫のメスを受けつつある。明かに充足過程であり、行動の過程である。およそいかなる必要から生じたにもせよ、自由な人間がみづから統一しつつ

ある彼自身の生活秩序の中で選擇したところの行動のあらゆる状態は悉く充足過程であり、そしてその充足内容は最大限の満足中に算入さるべき一部分でなければならぬ。

しかるに我等のすでに心づくことは、右に列舉された生活過程中にはまだ擧げてないところの他の一群の行動が存在してゐるといふことである。彼は種子を蒔きつつある。彼女は毛糸を編みつつある。彼は石炭を掘りつつある。彼女は水を汲みつつある。——これらの行動を觀察するとき、我等はそこに共通な性質を一つ發見する。共通な性質とはこれら一群の行動の意味は、いづれもその行動自体のみによつては理解されず、その行動の外にあるところの何等かの目的物にかかはらしめてのみ理解しうるといふ一點である。彼が麴麴を食べてゐるといふことや、彼女が歌をうたひつつあるといふことは、それらの行動自体のみによつて一應その意味を理解しつくされるものであり、彼等の行動はそれ自体のなかに目的をもつてよいのである。しかるに彼が種子を蒔きつつあることや彼女が水を汲みつつあることに至つては、行動自体のなかにその目的をもたず、行動自体によつてその行動の意味を完了することを得ない。種子蒔くことは楽しく、また水汲むことは若きエルテルが觀じたやうに、人生における最も罪のない仕事かも知れぬ。にもかかはらず之らの行動はそれらの理由によつてその意味を完了することのできぬものであり、行動の結果としての行動の外にある何物かの獲得に照らしてのみ、その全幅的な意味を理解しうるものである。蒔いたものを刈取ること、汲み上げた水を家に持ちきたること、そしてそれらのものを生活充足過程の中に攝取するといふ終局的な目的——しかもこれすらも終局ではなく、單に多くの究竟的な生活目的として、觀念されてゐるものへの到達條件としてのみ考へることも可能であるが、——に照らしてのみ、

その行動の意味を完全に理解しうるものである。

我等の周圍に最も近く生活してゐるところの野禽、——たとへば雀を觀察するとき、さえずり、飛び、枝をわたり、絶えず遊んでゐるやうでもあり、絶えず餌をさがしてゐるやうでもあり、——我等は殆ど雀の行動のなから遊んでゐる部分と餌をさがしてゐる部分と警戒してゐる部分と休息してゐる部分とを鑑別することができない。恐らく我等の遠い、祖先もまた殆どこの野禽の生活に類するやうな生活を閲した時期があつたに相異ない。我等はかかる生活状態の中に何等かの秩序を考へることは不可能である。箇々の行動の意味は、そのあるものはそれ自体の中に、またあるものはそれ自体の外に、その目的を思ふことによつて一應理解することができるけれども、かかる生活過程のなかに一つの生活秩序が存在してゐるであらうと考へることは殆ど不可能である。

ただ我等の斷定し得ることは、人類は他の多くの動物とおなじく一つの決定的な運命によつて先天的に自然と結びつけられてゐるといふこと、しかも植物のごとく固定的に與へられた地點からその生存に不可欠な自然の營養を攝取するのではなしに、みづから探し求めてその生存に不可欠な自然の營養を獲得し、そしてこれを攝取しなければならぬといふこと、したがつて人類がその存在の地點を絶えず動かなくてはならないといふことは、他の極めて多くの動物の場合と同様に、動くといふことそれ自体が彼等の生理的本性であるといふ反面と結びつけられてゐるところの決定的運命であるといふことである。

位置を變へて食を求めるといふこと、——この單純な一事の中に人類の、またすべての動物の、本然的な生活様相がある。人間の生活過程のなから假りに他のすべての行動を排除しうるとしても、この位置を變へて食を求

めるといふ行動、すなはち生活のそれなくしては存続しえない基本的充足のための行動を排除することによつて、人間生活の本然的な特質を理解することはできない。人類が何を探し求め何を獲得するかといふことは、その生理的の必要條件から逸脱しないかぎり全く自由であるが、自然にたいし何ものかを探し求め、自然から何ものかを獲得しなければならぬといふ關係に至つては何等取捨選擇の自由なく、決定的に結びつけられた運命である。したがつて人間の生活過程を理解しようとするとき、その生活はすでに述べたごとく悉く行動の過程ではあるが、特に先天的に自然との關係において制約され、不可避的に自然との直接の關係において發展しなければならぬところの行動過程にたいして第一に我等の焦點を向けなければならぬのは當然でなければならぬ。その生存が決定的に自然に結びつけられてゐることから必然的に生ずる、この人類の行動過程が、その性質上氣ままな形態をとることはゆるされず、自然的及び生理的條件によつて厳しく制約されなければならぬといふことも容易に考へられるところである。また内的必要が最も決定的であるとともに最も持續的であり、しかもその外的條件がつねに嚴酷ですらあるところの、かかる生活行動が、人間の全生活においてその統一の重心點を占めなければならぬといふこと、そして若しも人間の生活過程の中に何等かの秩序の發生が見られるとするならば、恐らくその秩序はかかる行動を起點として、かかる行動過程の發展として、成立しなければならぬといふことも疑を容れぬところであらう。さう言ひ得なければ、少くとも我等のいひ得ることは、すでに人間に生活秩序の存するところ我等はその秩序の理解への起點としてかかる行動過程を眞先に選むといふことが至當でもあり必要でもあらうといふ一事である。

いまこの過程を獲得の過程と呼ぶならば、獲得の過程は人間生活中最も重要な不可避的な過程である。この不可避的といふことは、取捨をゆるさぬ束縛的なものといふ意味に近いものではあるが、しかし獲得の過程が直ちに犠牲であり苦痛であると考へらるべき理由はいささかもあり得ない。人間がちつとしてその位置をかへぬこと、そしてその全身を動かさぬこと、いかなる企てをも試みず、何物にむかつても心身を緊張せしめないことが理想的状態であるならば、獲得の過程は確にその理想的状態とは矛盾するところの一の不可避的な害悪であり、犠牲であらう。この過程をもつて一の犠牲的過程であると解する見解は、人類のあひだにおそろしく深く、おそろしく廣い。にもかかはらずかかる見解は不健全な見解であり、この不健全な見解は現實の不健全な生活關係から發生し、その關係によつて支持されてゐるのにすぎない。この生活過程を目して不可避的な害悪とする見解は畢竟するに、一の世界觀に歸着せざるを得ない。その世界觀は獲得の過程を回避することによつてなほ且つ生きているのできた生活者階級——經濟的には寄生的であるが、社會關係的には支配的であるところの生活者階級——の存在と無關係に發生したものでなく、無關係に存続することのできるものでもない。

生活過程は一貫して行動の過程であるが、この行動過程中獲得の過程は最も積極的な、最も重心的な、それ以外の諸過程すらも、この獲得過程にかかはらしめて肇めてその意味の完了を期し得るやうな過程である。この過程から分離せしめてそれ自体として理解し得るやうな他の過程は、極言すれば一つもない。健全な思想をもつすべての人は、休息の過程をもつてただ積極的行動の過程に隨伴すべき必要なる過程と考へるであらう。

獲得の過程は人間生活に固有の不可避的な過程であるが、それが不可避的な過程であるといふことは、直ちに

それが害悪であり犠牲であり負擔であるといふことにはなりえない。あたかも人間の性的過程が人間生活に固有の不可避的の過程であるといふ事由によつてそれが直ちに犠牲であるとは言ひえないのと同様である。獲得の過程が獲得の目的物を在外的にもつといふ理由によつて過程そのものが一つの手段であると見るのは、一應正しいが、この手段の提起がそれ自体一つの犠牲であるといふ見解は直ちに正しいとは言ひえない。それは時間的制約によつて限定された一つの量的過程である以上これを合理的に構成すべきは當然であるが、しかもなほこのことは過程それ自体を一つの害悪犠牲として考ふべき根據たりえない。いま限定された時間内に種々なる享樂を遂げようとするものにとつて、各種の享樂は時間的制約によつて合理的に構成されなければならぬはもちろんであるが、このことは少しも享樂そのものを一つの害悪犠牲であると觀ぜしむべき根據とはなりえない。およそ節約されるべきものが支出される過程はすなはち一つの犠牲であるといふ考ほど普遍的に人々を支配してゐる考はない。しかもこの考がそれほど普遍的であるといふことは少しもこの考が正しいといふ證明とはなりえない。限定された或る素材を奪はれるといふこと、破壊されるといふことは、明かに害悪であるが、その素材の總量を合理的に支出し形成する過程そのものは決してそれ自体犠牲でも害悪でもない。獲得の過程は限定された時間と精力との一方的支出であるが、獲得の過程にかぎらず、いかなる生活過程といへども時間と精力とを消耗しない過程はありえない。人間は生命のあるかぎりねむりながらも時間と精力とを消耗することから免れうるものではない。獲得の過程をもつて直ちに犠牲の過程であるとか考へることは、その過程が節約原理にしたがはねばならぬといふ事情から生ずるのであるが、節約されるべきものが節約原理にしたがつて合理的に支出されてゐるかぎりその

支出過程はいささかも害悪ではなく犠牲でもない。獲得過程たる人間一切の労働の内面的本質を主観的な苦痛感に求めるごときは、みづから労働せずして他の階級に寄生する諸階級の傍觀的世界觀が生み出した妄念的理論にすぎない。かかる傍觀的世界觀から發した經濟學上の苦痛理論が無産階級の科學たりえずして、却て『ブルジョア經濟學』の基本觀念たる現狀をかへりみればよいのである。だがこの苦痛觀念はいまや『ブルジョア經濟學』においても次第に疑問視せられるに至り、晩近の經濟學はこの理論をいさぎよく排棄せんとする徴候を示しつつある。^(註)

生活内容としての行動過程のうち、獲得過程が、一箇の手段的部分であるといふ意味において合理的に處理さるべきものであるといふことは當然である。その合理的な處理は部分的には節約原理としてあらはれるのをつねとするであらうが、しかもこのことは獲得過程それ自体が一つの犠牲的過程であるといふことを決して證明するものではない。もし今日の工場労働者の一日の生活から日中十時間の労働時間——この部分が彼等の獲得過程である——をそっくり奪ひとり抹殺しえたとして、彼等にただ夕べの賃銀のみを支拂ふと假定するがよい。賃銀制度における労働をいかに呪ひつつあるものといへども、かかる空虚なる状態に堪へられるものは病人をのぞき恐らく一人としてないであらう。もし労働が眞實労働者にとつて望ましからぬものであるとするならば、それはいまだ労働以外の他の生活過程と對比されることによつて相對的に好ましくないといふにすぎないのであつて、一旦この對比を絶するやいなや、労働はあたかもそれ自体、積極的な、悦ばしき過程であるかのごとく感ぜざるをえないのである。このことは労働そのものの本質といふよりは活動そのものの本質であり、生そのものの本質であ

る。すなはち生の悦びは人間生活のいかなる具体的過程をもつてしても本来排除しうべきものではなくして、かへつて過程そのものがその動因あるによつて進展しうるところの、もつとも本原的な、無意識的な、動物的な、神的な、燃焼的な、音楽的な、ほとんど正體のつかまへがたい何ものである。

この獲得の過程に對立するものとして、何を考ふべきであらうか。獲得された目的物についての享樂の過程こそ、それである。人々は思ふであらう。この考に對して反對すべき理由はすこしもない。だが享樂の過程とはそもそも何であるか。獲得の過程すら一つの充足過程として考へられる以上、明かにそれもまた充足過程であるが、すべての充足過程は行動の過程である。靜止的、非行動的な享樂過程は、すべての充足過程の中で最下級に位するものであり、その極限は横臥および睡眠である。飲食は、その附隨的過程として多數の過程を、いな、むしろ飲食をこそ附隨的過程とするところの、非常に多數の、あらゆる等級の、充足過程が存在する。享樂過程と認むべきもののうち、その高度に達したものに至つては、もつとも緊張した、激烈な、行動過程であつて、この行動過程は、一般的社會的な獲得過程における秩序的な諸行動の及ぶべからざる激越性を呈するに至る。人々は飲食をもつて消費過程と考へ、或はすくなくとも代表的な消費と考へるのをつねとするが、一般に消費過程もまた行動の過程であつて、飲食のごときは獨立した過程といふよりは、他の行動過程の附隨的過程たるを常とし、同時にまたその行動過程の基礎的契機たるにすぎない。人間はその普通の生活において飲食そのものを單獨に享樂するといふことはむしろ例外であり、それはつねに他の社會的な、家族のあるひは社交的な行動過程に隨伴すること、つまりすべての飲食は、對手との交歡なしにはまづいといふことは何人も知るとほりである。享樂過程の代

表的なものの一つは旅行であるが、旅行はかなり積極的な行動の過程である。狩獵その他の享樂過程は、高度にすすめばすすむほど、その具体的形態において獲得過程に接近し、そのもつとも高度のものに至つては、通常の社會的獲得過程をはるかに超えて激しい緊張を必要とする。享樂過程を高めようとするほど、その具体的形態においても、内面的實感においても、獲得過程に接近せざるをえないといふことは決して偶然ではない。このことはただ活動のみが人間の本性であり、そしてこの活動を一定方向にむかつて適當に高調せしめてゆくといふことのみが、人間生活の充實過程であり、生活内容であるといふことを語るものに外ならない。すべての高度の科學的作業並びに藝術的作業は、それ自体作業者にとつて無上の享樂過程であるが、それはまた同時に簡人的にも社會的にも獲得の過程である。殊に社會的には、かかる分野における天才者の享樂獲得の過程ほど重大な價值をもつてゐるものはない。

我等はすでに、時間的過程としての人間生活のすべての内容を、欲望充足過程と解することによつて、一切の行動が行動者自身にとつてそれ自体好ましき過程であると解してきた。しからば、いかにしてかかるすべての過程が、簡人の内部における統一性を失ふことなしに展開されうるのであらうか。いかに種類を異にし、實を異にする諸過程といへども、本質的には同一の過程の種々なる具体的様相であると解するのでなければ、これをまづ一簡人の生活のなかの統一的なあるものとして理解することはむづかしい。かくて我等は再び第五節の最後の問題に立ち還らざるをえなくなつた。問題はまだ少しも解答をあたへられたのではない。我等は解答をいそぐ代りに、かへつて問題の内容を分析し、そしてその一層困難な斷面を展開した。だがこのことはこれに對する解答を

一層十全なものたらしめるために必要な過程であつたのである。『人間生活と經濟法則』第一章未定稿)

註 本篇の筆者はさきに次ぎのやうに論じたことがある。『勞働はたとひ全き快樂なりとも、財貨獲得の一般的手段として考へられ、そして明かに有限のものであるかぎり、その提供は疑ふべくもなく「犠牲」なのであつて、所謂經濟の本則はこの勞働をも支配せざるを得ないのである。』『惟ふに、勞働は力作それ自体が純然たる快樂であるとしても、これを經濟理論において「費用」と觀念することは何等妨げなきものであつて、重要な見解は、力作そのものの、快樂・苦痛の如何にあるにあらず、分量上限りあるもの、提供といふ一點に存する。この分量上の有限性は恐らく價值發生の缺くべからざる、そして唯一の條件であらう。』(『社會思想家としてのラスキンとモリス』昭和二年新潮社版)これは筆者が小泉信三教授の所説を批判した一篇のなかの部分である。

近時高田保馬博士は同じ問題を次ぎのやうに論じられてゐる。經濟原則は『勞働の苦痛と獲得せらるゝ效用とを相殺して其餘剰を大ならしむる點に有すと解するを要しない。勞働は必ずしも苦痛ならず、それが快なるものであるにしても、手段財であり數量有限である以上、その合理的に代償として用ひらるゝところに、經濟原則の作用がある。』(『經濟學』昭和三年日本評論社版)なほ A. Amann 教授の邦譯書『リカアド』一九七頁を見よ。そこでは勞働の苦痛理論が稀少性理論のかけに最後の餘喘をたもたうとしてゐる。一つの新しいものが生れてくるためにその萌芽時代があるやうに、すでに無効なものが消滅するためにも多少の年處を要する。苦痛理論は消滅の過程にあるのである。さらに宮田喜代藏教授譯 R. Liefmann『原論』の舊版と新版とを對照すべく新譯の出版を期待しよう。兼れて教授の談によれば著者は新版において苦痛概念を排棄したさうである。苦痛理論をもつとも早く無効と斷じた學者は、獨逸最大の理論家 H. Dietel である。彼は勞働の苦痛理論をもつて『砂上の樓閣』であると考へた。